福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

Prima hominis productio と imago Dei について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3053

Prima hominis productioとimago Deiについて

坂田　登(*)

三つのペルソナを有する濃密な人格神としての性格を強く持つ創造主、神による最初の人間の創造（creatio）あるいは産出（productio）のとき、人間は神との関係においていかなるものとしてつくられたのか。トマスはその『神学大全』第１部第90問から93問にかけて、最初の人間の創造あるいは産出（productio）、特に魂（anima）に関する産出、肉体に関する産出、女性の産出そしてその人間に見いだされるところの神の像（imago Dei）について論じている。この小論においては、そのような最初の産出における、また神の像としての人間の在り方について、またそもそも人間はいかなるものとして創られたのか。そのようなことについてトマスのテキストに即して考えてみたい。

では、まず魂（anima）の産出に関して、創世記２章７節において次のように語られている。「神は土地の塵で人を形造り、その顔にいのちの息を吹き込んだ。そして人は生ける魂にされた。(1)」それでは、神から吹き込まれたいのちの息とは神の実体（substantia）の一部なのであろうか。しかし、トマスはこのようなことは認められないという。なぜなら、人間の魂は時として可能態において認識するものであり、神のようにつねに純粋な現実態にあるわけではない。また、諸事物から知識（scientia）を集めなければならず、さらには様々の異なった能力を有している。このようなことから人間の魂は、すべてを同時に一つの自己認識という知性的はたらきによって認識する神の本性（natura）とはまったく異なったものなのである。

しかしながら、なぜ人間の魂と神の本性とを同一視するというような過ちを人は犯すのであろ

(1) Formavit Deus hominem de limo terrae, et inspiravit in faciem eius spiraculum vitae, et factus est homo in animam viventem.
Gen. 2, 7

*福井大学教育地域科学部

うか。まず、第一に多くの人はものの本性物を考察し始めるのにあたり想像力を超えて、物体的なものとは異なる非物体的なものを考えることができないからである。そして、神を物体的なものとし、他のもろもろの事物の原理（principium）であると考える。これはちょうど現代の人々が物体的なものであるDNAをあらゆる生命の原理と考え、その考え方が正しいのか誤っているのかは別にして、DNAによってあらゆる生命現象を説明できると考えるのに似ている。また、これと近い立場をとったのがマニ教徒たちである。彼らは神をある種の物質的な光（lux）とみなし、人間の魂もそのような光の一部であると考えたのである。

また、第二に神を非物体的なものと考えることはできたが、神を物質を超えたものとは考えることができず、物体の形相とする人々がいた。すなわち、アウグスティヌスが『神の国』第7巻に紹介しているヴァッロ（Varro）のように「神はその運動と理性とによって世界を支配する魂である[2]」と考え、人間が宇宙全体の一部であるように、人間の魂もそのような全体的な宇宙霊魂のごときものの一部であるとしたのである。そして、彼らは物体の区別にもとづいてしか、霊的実体を区別することができなかったのである。[3]

そこで、「神がいのちの息を吹き込んだ」といことは、物質的な意味で理解されるべきではなく、それは「霊をつくった（spiritum facere）」という意味に解されるべきなのである。実際、人間が息を吹くという場合でも、彼は自らの実体の一部を吹き出しているのではなく、それとはまったく異なったものである。[4] また、人間の魂が、神と同じように、その本質において単純な形相であったとしても、人間の魂においてその本質と存在とは異なり、その存在はあくまで神から分有（participare）されたものである。その本質がその存在と同一である神と人間の魂とはあくまで絶対的に区別されるものなのである。[5]

また生命の原理としての魂に関して、中世においても、それは神の創造によってではなく、何か質料的なもの、あるいは物質的なものから生じたものであるとするものもいた。例えば、湿ったものに黴が生えたり、汚物に蛆がわいたりするような場合を考えるとよい。一定の物質的条件があれば、それに何か、我々の感覚には捉えられない天体に由来する微細な（subtilis）な力がはたらいて生殖のはたらきなしに新しい生物が発生すると中世の人々は考えていた。これは、現

---

[2] Deus est anima mundum motu et ratione gubernans.
Aug. De Civ. Dei Ⅶ, 6

[3] ST., I, q.90, a. 1.

[4] ST., I,q.90, a. 1, ad 1.
spiritusという語は動詞spirare（息をする）から派生している。これはギリシャ語のπνεῦμαやヘブライ語のruachと同様である。古代の人達にとっては目に見えない、しかしそれが消滅すると同時に生命も終わりを告げる不思議な力をもつものである。ここから、比喩的に、物質的なものとは異なった霊的な実体のことを意味するようになった。

[5] ST., I,q.90, a. 1, ad2.

代の人々が、原始地球の海において、海水に溶けた有機物の化学的進化によって原始生命体が生まれたとする考え方とも似ている。

しかしながら、トマスは「神は人間を自らの像に創った」という『創世記』の言葉に従って、人間の理性的魂は、神による直接的創造によって存在へともたらされたと考える。自らの存在において実在する形相（forma subsisitens in suo esse）としての人間の魂は神の創造によってしか存在へともたらされることはないのであり、先に置かれた地上の物体的あるいは天体の霊的質料から生成するようなものではない。[6]

それでは、そのような人間の魂は肉体（corpus）よりも先に創られたものなのであろうか。例えば、オリゲネスは最初の人間の魂のみならず、すべての人間の魂はその肉体の創造以前に天使たち（angeli）とともに創られ、その報い（meritum）に従って、肉体に結びつけられ、その肉体を支配する（administrare）ようになったと考えた。これはまさしくプラトン主義的な考え方である。しかし、トマスはあくまで魂を肉体の形相と考え、完全な人間の一部であると考えた。そして、神は最初から事物をその種（species）としての本性（natura）において完全なものとして創ったのであるから、肉体に結び付けられていない不完全な存在者としての魂だけを先に創ったとは考えられないのである。魂は肉体の死後もその存在を失うことがないとしても、肉体を持たない人間はあくまで不完全なものである。[7] 人間とは受肉してこの地上に生きるべき存在者であり、この地上の生や、仏教徒の考えるような輪回転生から解脱すべき存在ではない。

では、我々がまさに受肉しているところのその肉体とはどのようにして産出されたのか。地上において最も偉大な存在者とされる人間の肉体が土地の塵から創られたというのはおかしなことではないのか。最も偉大な神の能力によって、土の塵からではなく、むしろ無(nihilum)から創りだされるべきではなかったのか。地上の物質からではなく、より高貴な(nobilior)天上の物質から創りだされるべきではなかったのか。なぜ、地上の物質の中でもより高貴な火(ignis)や空気(aer)からではなく、土(terra)と水(aqua)の混合物でしかない土地の塵から創られたのか。[8]

しかし、神はあくまで完全な創造者として、それぞれ異なった仕方で、それぞれのものにその完全性を与えていると考えるべきである。例えば、天使に与えられた完全性とは、全てのものについての認識を最初から神によって与えられているということである。そして、より下位の階層

---

[6] ST., I,q.90, a. 2.

[7] ST., I, q.90, a. 4.

[8] 中世の自然学においては、地上のあらゆるものは、火、空気、水、土の４元素から構成されており、生命は主に火の熱と空気の湿度によって産み出されると考えられていた。また、天上の物体はこれら４元素とは異なる第５の元素、aetherと呼ばれるより繊細で完全性の高い元素から構成されている。そして、このような元素からなる天体（月、太陽、惑星、恒星など）は地上の物体とは異なり、生成消滅を繰り返すことはない。

にあるものとしての人間に対しては、異なった完全性が与えられている。人間は天使たちとはちがい、その本性的認識において最初からすべてのものについての知（notitia）を持つわけではないが、その魂と肉体を合わせた全体においてすべてのものから構成されている。霊的実体の類（genus）に属するものとして、理性的魂を持ち、また天上の物体との類似において、その肉体はもっとも均整のとれた要素の構成を有している。すなわち、生命を構成する主要な要素である火と空気、そして、われわれの肉体にはもっとも多く含まれるところの水や土という諸要素によってみごとな均整を保つ仕方でつくられている。そうして、これらの水や土といった要素が人間の肉体には多く含まれることから、それは「土の塵から創られた」と言われるのである。そしてこのような人間はまさしく小宇宙（minor mundus）とも言われる。[9] 肉体を有するというまさにこのことにおいて、人間は天使とはまったく異なる使命を与えられた。人間が肉体を有するということはたんなる不完全性を意味するものではない。むしろ、この地上において肉体をとおしてあらゆる知を集め、あらゆる地上的なもの、そして特に同じ肉体を有する他の人間たちとの間に、まさに肉体をとおしてふさわしい関係性を構築し、そのような地上における生によって永遠なるものを求めていくという使命を与えられたのである。

また、人間の肉体はその形相であり、また目的でもあるところの理性的魂にもっとも適合するようにつくられている。多くの動物には人間よりもはるかに優れた感覚や運動能力、それに強靭さが与えられており、人間の肉体はそれらに大きく劣っているように思えるが、理性的魂の能力を最大限に発揮して、人間をその目的へと向けるには最適なものといえる。感覚は人間にとってただ単に生命維持のためにだけ与えられているものではなく、むしろ理性的認識のためである。四つ足で頭部を地面に近づけている動物たちの感覚は食物を探し求めるには適している。しかし、直立している人間は天と地すべての世界の真理と美をその感覚をとおして集め、そこにより高い喜びを見出すことができる。[10]

また、『創世記』の記述によれば、女は男のあばら骨（costa viri）から男の助け手（adjutor）として創られたと言われる。そして、トマスはそのような女の男に対する従属性（subjectio）を認めている。今日では、このようなことはもはや認められないことであろう。しかし、トマスによれば、従属ということには、ふた通りの仕方がある。ひとつは奴隷状態における従属であり、この場合、従属する者はその支配者にとっての有用性のためにのみ利用される。このような従属関係とはあくまで原罪の後にこの世にもたらされたものである。もうひとつは、経綸にもとづく従属（subjectio œconomica）、あるいは市民的従属（sujectio civilis）であり、この場合、支配者

---

[9] ST., I, q.91, a.1.

[10] ST., I, q.91, a. 3.

は支配される者を彼ら自身の有用性と善のために用いるのである。このような従属関係は今日の世界においても見いだされるかもしれないが、やはり原罪以前の人間たちの在り方である。ある者が他のより優れた者によって支配されるということがなければ、人間たちの間に秩序のもたらす善（bonum ordinis）はなくなってしまう。そして、このような仕方で本来（naturaliter）、女は男に従属する者であるとトマスは考える。なぜなら、男の方が理性の識別力（discretio rationis）において優っているからであるという。このようにして、トマスは原罪以前の無垢（innocentia）の状態にあっても男女の不平等（inæqualitas）は本来的に存在したと考えるのである。[11]

では、人間が神の像（imago Dei）として、あるいはそれに向けて創られたとはどのようなことを意味するのか。どのようにして神の像は人間のうちに見いだされるのか。トマスはまず、像（imago）と類似（similitudo）、等しさ（æqualitas）を区別する。アウグスティヌスが言うように、像があるところには常に類似があるが、類似があるところには常に像があるというわけではない。像は単なる類似ではなく、それに何かを付け加えるものである。すなわち、他のものから表出（expressum）されたものであるということである。そのようなものは他のものをまねようとするはたらき（imitatio alterius）をもつ。例えば、卵は他の卵の類似あるいはそれと等しいものであるが、それから表出されたものではない。それゆえ、卵は他の卵の像（imago）とは言われないのである。また、像があるところには、かならずしも等しさがあるわけではない。例えば、鏡に何かの像が映っているような場合である。ここには等しさはないが、完全な像がある。もとの範型（examplar）となるものから表出された何かがそこにあるからである。

しかるに、人間のうちにはその範型としての神に由来する何らかの神との類似が見いだされる。しかし、もちろんそれは等しさにおける類似ではない。神は人間を無限に超えたものだからである。それゆえ、人間のうちには完全ではなく、不完全なものではあるが、神の像があると言われるのである。そして、聖書に「神の像に向けて ad imaginem Dei」と記されているのは、神から遠く離れた存在者である人間が神に近づいて行くべきものとして創られたことを意味するのである。[12]

そのような神の像は非理性的存在者においては見いだされるものではなく、理性的存在者においてのみ見いだされる。[13] そして、すべての人間は理性的存在者である限りにおいてみな神の像である。知性（理性）を有する限りにおいて人間は神の像へと向かう存在である。知性的本性にもとづいて人間はもっとも神をまねる（Deum maxime imitari）ことができる。そして、神をまねるとは、自らを認識し、愛する神をまねることである。自らを認識し、自らを愛することこ

---

[11] ST., I, q.92, a.1,ad 2.

[12] ST., I, q.93, a.1.

[13] ST., I, q.93, a.3.

そ神の第一のはたらきである。そこで、人間においては三通りの仕方で神の像が考えられる。第一に、人間が神を知り、神を愛することへの本性にもとづく適性（aptitudo）を持っていることにおいてであり、このような適性は、すべての人間に共通する精神の本性（natura mentis）そのものにおいて成立する。第二に、人間が神の恵みとの一致（conformitas gratiae）によって現実態あるいは能力態（actu vel habitu）において神を知り、愛することにおいてである。そして第三に、栄光（gloria）において完全な仕方で神を知り愛することにおいてである。この三つはそれぞれ、最初の創造における人間、キリストの救いのわざによる第二の創造における人間、最後の栄光の時において、神を顔と顔をあわせて（facie ad faciem）見る人間に対応する。第一の意味での神の像はすべての人間において見いだされ、第二の意味での神の像は信仰によって義とされた人間において、第三の意味での神の像は栄光において至福（beatitudo）へと導かれた人間においてそれぞれ見いだされる。[14]

さらにこのような人間においては、ペルソナ三位一体性（Trinitas personarum）に関してもその神の像が見いだされる。すべての被造物において、それらが存在すること（esse）、また生きこと（vivere）にしたがって、何らかの神の痕跡（vestigium）が見いだされるが、三位一体の像が見いだされるのは認識する（intelligere）人間の精神（mens）においてのみである。神の三位一体性は語る者すなわち父（ pater）からの言葉（verbum）すなわち子（filius）の発出（processio）とそれら両者からの愛の発出（processio amoris）において区別される。そして、この同じ構造が、理性的被造物においても見いだされる。すなわち、知性における言葉の発出と意志における愛の発出である。他の被造物においてはこのような言葉の源泉（principium verbi）と言葉、愛の区分は見いだされない。[15]

知ることと愛することにおいてわれわれ人間は神の三位一体の像である。では、何を知り、何を愛するのか。神の三位一体において、神は自らを認識し、そして愛する。そのことにおいて完全なペルソナ（人格）としての充実した関係性を有しており、神は自らの充実や至福のために他の存在者を必要とすることはない。しかし、不完全な存在者である人間は自分自身を知り、愛することだけでは至福に達することはない。理性的存在者として創られた人間は、肉体のはたらきをとおして世界と他の人間たちとの人格的関係性を築き、さらには同じく人格的存在者である神との充実した関係性へと向かわなければならないのである（隣人を愛し、神を愛すること）。このことにおいてしかわれわれ人間にとっての幸福は見いだされないのである。これがまさしく人間を理性的存在者として、また同時に肉体を持つものとして創られた神の計画であろう。

---

[14] ST., I, q.93, a.4.

[15] ST., I, q.93, a.6.